

教王護国寺（東寺）境内現地公開資料

平成22年11月20日（土）
財団法人京都市埋蔵文化財研究所
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

遺跡名：史跡教王護国寺境内
調査地：京都市南区九条町
調査期間：10月18日から継続中
調査面積：約160㎡

はじめに

この調査は、教王護国寺（東寺）境内築地修理工事に伴う発掘調査です。調査地は平安京跡左京九条一坊十三・十四町および大宮大路にあたり、平安時代から現代まで長きにわたって東寺の東築地塀と大宮大路（大宮通）が存続しているところです。

東寺は西寺とともに平安京内に造られた官寺で、延暦十五年（796）に創建されたと伝えられます。寺域は八町を有し、北側の四町は政所院などの寺院経営に関わる区域、南の四町は主要堂塔の区域となり、創建当初から建立されていたのは南大門・中門・東西廊・東西軒廊・金堂でした。

今回調査している東築地塀は、長保二年（1000）に宝蔵が焼失した時に類焼し、修理したという記録が残っています。ただし、この時の東築地は瓦屋根や柱を持つ構造ではなく、盛土の上に板を並べて横棧で留め、棟に土を盛っただけの「上土塀（あげつちべい）」であったとされています。現在見られるような瓦葺きに造り替えられたのは、築地造営の記事がある鎌倉時代末頃と考えられます。

その後、文禄五年（1596）の大地震で崩壊しましたが、江戸時代に修理され、以後も瓦葺き替えの修理などが行われました。現在の築地塀の中には江戸時代とみられる築地が部分的に残されています。

調査区は東大門の北側に4箇所、南側に4箇所を設置し、調査は旧築地が残っていない一部の築地内も含めて行っています。

調査の成果

各調査区では築地盛土、南北方向の堀西肩部、礫敷き面などを発見しました。

築地盛土 平安時代から江戸時代、一部近現代のものがほぼ同じ位置に残っていました。江戸時代とみられる築地より古い築地盛土は、築地の基礎部分にあたり版築さ

れています。遺物は細かいものが多く、平安時代以降の土師器皿などが出土しています。その他に、4トレンチでは凝灰岩の切り石がほぼ南北方向に並んで見つかりました。築地が基壇の上に造られていたとみられ、その縁石の可能性もあります。

堀 調査区東端では南北方向の堀西肩部分を検出しました。規模は幅約2m以上、深さ約1mです。境内地北側の調査で幅が4～5mになることがわかっています。最下層の埋土から室町時代頃の土師器皿片などが出土しました。検出した堀は、室町時代の正長から文明年間（1428～1487）に頻発した土一揆から伽藍を守る防御施設として造られたと考えられます。江戸時代後期頃まで窪地として残っていたようです。

礫敷き面 築地と堀の間に1～2面分を検出しました。1面目は江戸時代前期以降2面目は中世に造られたようです。2面目の礫敷き面には、現在の築地軒下から少し外側の位置に、雨落ち溝とみられる南北方向の窪みが残っています。2面目の礫敷き面からは中世の銭や平安時代の瓦などが出土しました。

支柱跡 版築をする際に柱を建て、内側に横板を並べ、その中に土を入れて突き固めて築地を造っていきます。木杵に相当する板が外に倒れないように柱を建てた跡です。時期は江戸時代後期以降とみられます。江戸時代の瓦が出土しています。

出土した遺物

築地盛土や整地層などから、瓦類を中心に遺物が出土しました。平安時代のものは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、丸・平瓦、鬼瓦、鎌倉時代のものは土師器、軒丸・軒平瓦、室町時代のものは土師器、焼締陶器、江戸時代のものは瓦類、土師器、肥前磁器、京・信楽陶器などがあります。その他に、中世の銭貨、飾り用の釘なども出土しています。

まとめ

東寺の東築地の位置は、現在まで動いていないことを改めて確認することができました。しかし、大宮大路の西側溝は推定される位置からみつかりません。その代わりに、4トレンチで凝灰岩列を検出していることから、大宮大路の西側溝はさらに東側に造られており、堀によって壊された可能性も考えられます。堀については、室町時代に造られ、江戸時代に埋まったという従来の成果に準じるものでした。

今後も調査は続けていくので、不明瞭な点を解明していきたいと思います。



図1 調査地位置図 (1 : 10,000)

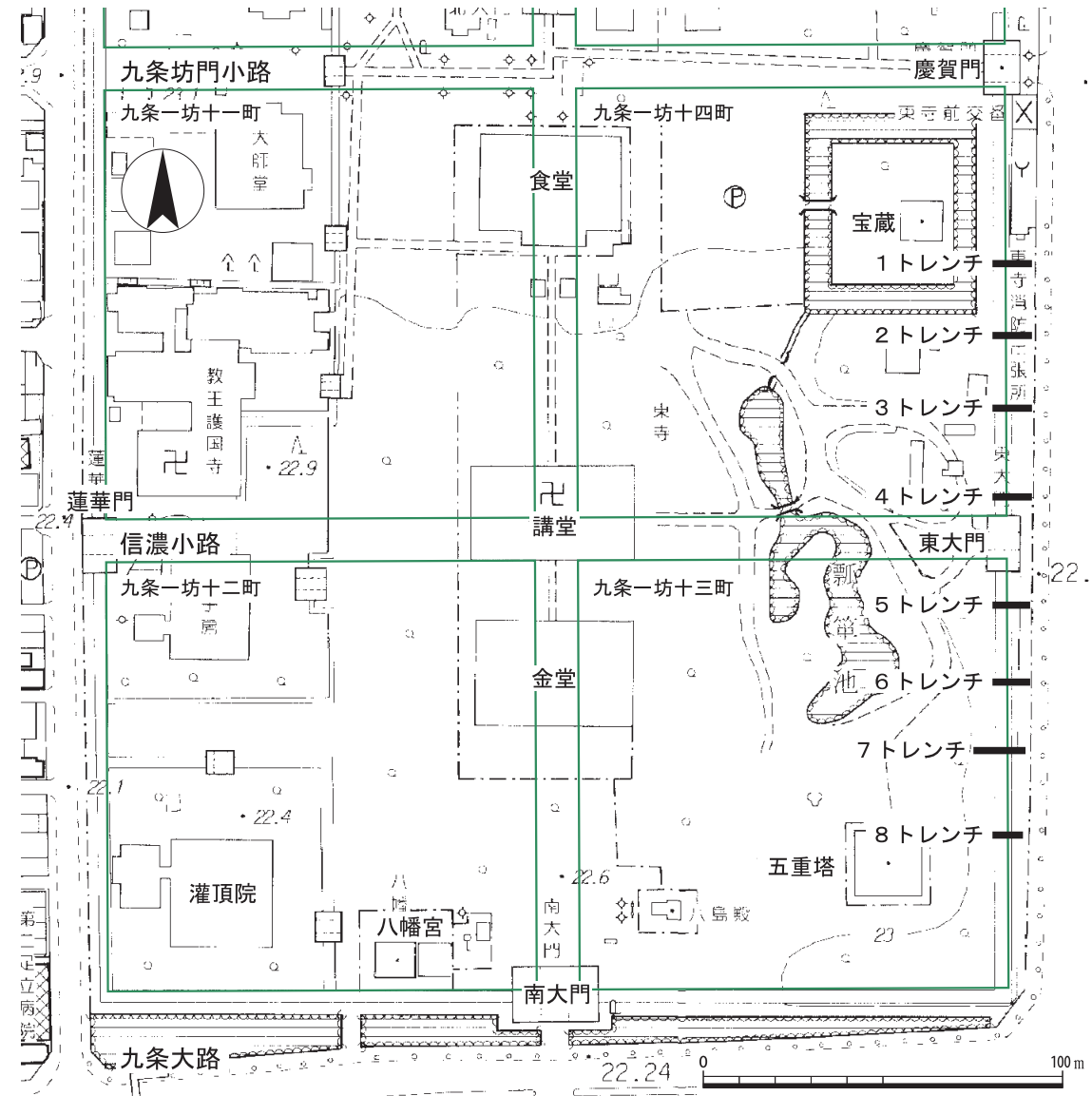


図2 調査区配置図 (1 : 2,000)

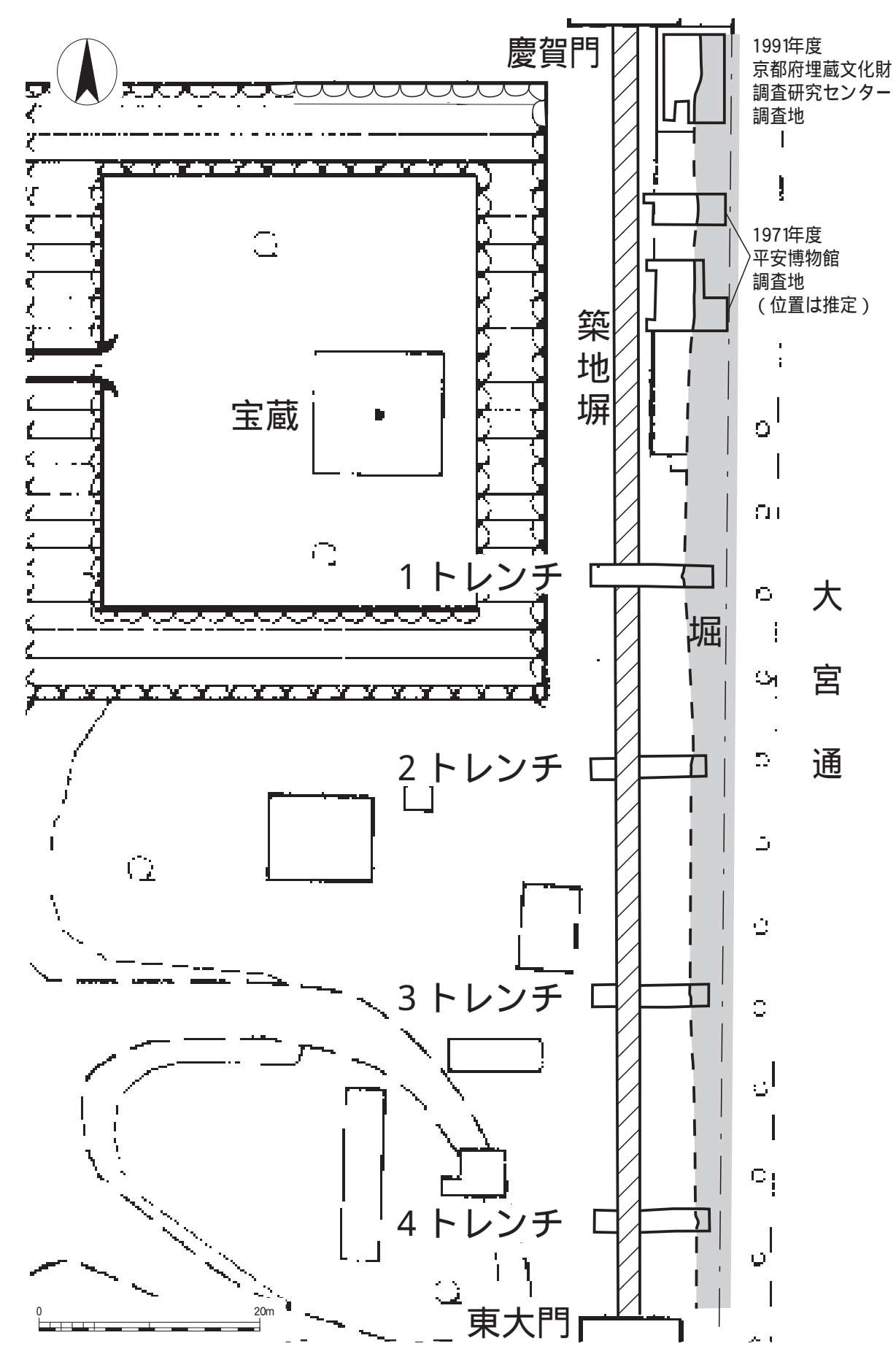


図3 東築地と堀との関係位置図 (1 : 500)

199年度
京都府埋蔵文化財
調査研究センター
調査地

197年度
平安博物館
調査地
(位置は推定)

大
宮
通